

●オフィス街の癒し空間「アーバンファーム」

東京駅付近を歩いていると、ふと目を引く建物があります。オフィス街のど真ん中で、1階が水田になっているビルがあるのです。大手人材派遣会社である株式会社パソナが今年の3月に元銀行金庫跡に「アーバンファーム」としてオープンし、ビル全体で200種類以上の植物を育てているということを知り、見学に行ってみました。

1階中央エントランスから入ると、目の前に水田が広がっています。天井からはメタルハライドランプと高圧ナトリウムランプという照明があり、稲の生育に必要な光を確保しているそうです。稲の生育には強い光が必要だそうで、この照明の下にいると相当暑く感じました。また、開花時の受粉促進、室内の熱だまり除去のために、人工風源で水田のそよ風を再現していました。このような稲に最適な環境を作ることにより、年3回の収穫が可能だそうです。

他にも、人工的に環境条件を制御し、計画的連続的に野菜を生産する植物工場、花畑などたくさん植物で各フロアが満たされています。また、ビルの中だけでなく、屋上・ビル壁面にも植栽が施されており、壁面バルコニーには落葉樹を多く用いることで、夏は冷房負荷の低減、CO₂排出量の削減が図られ、秋冬には葉が落ちて、室内に日光が入りこむなど、環境に配慮した工夫がされています。

緑の少ない都心のオフィス街で、自然を楽しむことができる「癒しの空間」にぜひ出かけてみてはいかがでしょうか。

写真⇒ <http://www.almec.co.jp/info/news.html>

尾上真理（株式会社 URリンケージ）

●EC02 Cities

最近、世界銀行から“EC02 Cities 横浜会議”というプロジェクトを受注しました。EC02都市というのは、環境（エコロジー）と経済活動（エコノミー）が調和した都市、即ち環境改善と経済開発が相乗効果を及ぼして都市が発展するという、いわゆる“持続可能都市開発”の概念を、環境を軸にデザインしたもので、世界銀行がこのプログラムをベースに途上国都市の援助を世界に展開しようとしているのです。中国の天津市を対象にパイロットプロジェクトを実施しながら“EC02 Cities : ecological cities as economic cities”という報告書が出版され本格的な活動が始まっています。

6月にはベトナムのホーチミン市で、7月にはスリランカのコロンボで途上国都市の代表者を招いてセミナーが開かれ、今年10月21-23日に横浜で国際会議が開かれることになっています。横浜で開催される理由のひとつは、日本では国や地方や民間レベルで様々な環境改善策が実践されてきており、この経験を整理して途上国都市の参考になるような知識として情報発信をするところにあります。このために世銀とJICAの主催で国交省と横浜市が後援、更には経産省、環境省等が様々な形で関わっています。

環境を都市計画や都市開発の柱にしようという動きは途上国でもEC02に限らず様々な形で始まっています。現在JICAで実施しているベトナムのダナン市総合都市開発戦略調査：DaCRISSでも環境都市をビジョンに掲げ、この実現に向けて戦略をたてプロジェクトを組み立てています。ロンアン省の地域計画：LAPIDESでも環境は重要な計画要素ですし、最近開始したベトナム中部高原のバンメトットの都市開発戦略でも同様です。また、都市計画策定技術能力向上プロジェクト：CupCupでも環境と都市計画は重要なテーマになります。こうした状況のなかで、上記のEC02プロジェクトを実施することになったのは大変良いタイミングで、その成果が現在実施中の案件に有用なインプットになります。

岩田鎮夫（海外室）

●観光舟運の魅力は尽きない

このところ4年ほど前から、主に隅田川を中心とした観光舟運に関する調査や社会実験などの取り組みを手がけているが、検討を重ねるごとにその魅力と可能性は膨らむばかりである。水都大阪と同様に、隅田川や江東内部河川など東京の河川は、運輸という経済的活動以外にも文化の交流や創造といった当時の都会人

の洗練された文化的空間として活かされてきており、その名残が屋形船などの船遊びや沿川地域の歴史・文化に見られる。

こうした河川空間自体をダイレクトに体験する舟運の魅力と、舟を降りた後の街歩き観光の魅力の一つのパッケージとして展開することで、行政区を越えた観光連携の可能性があるが見えてくる。

世界の観光地を見ても、ベネチアやアムステルダムあるいはライン川やセーヌ川など、舟による川と街の楽しみは様々なスケール感で来訪者を魅了している。もちろん、我が国の国際観光を推進するうえでも、東京においてこうした展開が必要である。

しかしながら課題もある。まずは街並みならぬ川並みがプアーである。かつて水運のために川に向いていた建物が道路に顔を向けてしまったために、船上からの景観は街並の裏側を見せられるのである。また、観光舟運の企画が浮上して必要時のみ舟運で観光連携を行おうとしても海上運送法によりA to Bといった多点多点間輸送を行うためには一般旅客定期航路事業など定期運航による航路申請が必要となる。さらに、公共が管理する船着場は民間活用に対して閉鎖的な状況にあった（最近、東京都は民間開放への対応方針を示した）。

こうした課題はあるものの、やはり舟でゆったりと移動するのは何とも言えぬ優越感がある。また、乗船者と橋や対岸の人々が互いに手を振り合う光景をしばしば目にするが、見知らぬ者同士がこうしたコンタクトを取るのには舟・川・水辺が織りなす空間の魅力がそうさせるのであろう。今後は、リバーフロントを基軸とした観光まちづくりは、地域の魅力や交流を高めるための重要な行政施策の一つとなるであろう。

そこで社会実験の宣伝です！・・・来たる8月27日（金）28日（土）に墨田区役所前の親水テラス、吾妻橋防災船着場において舟運社会実験を実施します。28日（金）には、①屋形船で水位調整をする扇橋閘門を体験するコース、②平船で北十間川に入るコース、③お洒落なクルーズ船で隅田川を遡上するコースの3つを有料で体験できます。また28日（土）には水上バスによる隅田川クルーズが無料で乗れます。

お時間が取れる方は是非、乗船していただきアンケート調査にご協力をお願いいたします！船着場周辺では、飲食テラスや各種イベントなど「吾妻橋フェスト」が同時開催されています。

詳しくは⇒ <http://visit-sumida-special.jp/azfest/>

海口晴彦（第二計画部）

発行責任者：代表取締役 庄山 高司
事務局：株式会社アルメック 業務部
東京都目黒区青葉台 1-19-14
電話 03-5489-3211・FAX 03-5489-3210
Eメール hotnews@almec.co.jp
ホームページ <http://www.almec.co.jp/>

Copyright 2010 ALMEC Corporation. All rights reserved.